

ミオヤの光

三身の巻

辨榮聖者御遺文

法身の讃

一 仰ぐも畏こき阿彌陀尊

摩訶毘盧遮那と號ては

六大無礙なる靈體は

遍ねく時空に亘りては

世々のあらゆる諸佛と

乃し生とし活く物の

されば一切の諸佛も

如來不思議の靈徳を

二 三身一如の法の身は

一切の本初に在ませり

萬徳法爾とそなはりて

永恒に自づと在ませり

天地よろづの神祇と

大御親にて最と尊し

有ゆる三世の聖等も

威な悉く讃めまつる

二

毘盧は宇宙の王に在し

天地萬ろづの物をみな

一切て智慧と能との

即ち因根の律として

あまつみ空に列なりし

地に生しげる草も木も

朝日眩ゆくかざやくも

射通る星のひかりをも

三

三界はすべて我が有ぞ

即ち我子とのたまへる

天地萬づのものをもて

一切萬法の則として

統攝すなり畏こくも

秩序正しき爲しますも

世界の衆生を生成せり

數へす星のめぐれるも

天則に係らぬ物をなき

冴やかに照らす月の影

法身の光榮を現はせり

生とし活ける物はみな

佛は我等が父なり

凭くは至大に設備ては

われら衆生を恵みます
明きひかりに新らしき
われらが命を賜ひます
我等は法身に受にける
攝化のひかり被むりて

報身の讚

一
本有 法身 阿彌陀尊
本覺眞如のみやこより
一子の慈悲の割なくも
何成る苦毒を受るとも
無量の願行 成就して
本迹不二なる 靈體を
無量光土にましまして
世界を照して 念佛の
衆生 至心に 信樂し
恩寵のひかりを蒙りて
光に遇は、罪も消え
身心ともに 安らげく
信心 眞に 得る人は
聖旨に契ふ子となれば
いよく命の終りには
慈悲の面影観まつりて

聖旨の程をたふとけれ
糧と清けき 澎氣もて
ミオヤの恩寵いと深し
靈性 木白 具ふれば
聖旨に契ふ子とならん

無明に迷ふ子らがため
法藏菩薩の 迹を垂れ
苦海の衆生を救はんに
忍んでつひに悔じとの
即ち十劫覺と現り給ふ
無碍光王と名づくなり
光明 遍ねく 十方の
衆生を攝取したまへり
佛の慈悲を 念すれば
便はら信心なりぬべし
歡喜はなく覺はへて
清きこころに蘇がえる
有漏の依身は變らねど
法子の天職を務むなり
一切の障礙盡きはて、
聖き御もとに到るなり

二

聖き啓示を 被むりて
報佛不思議の 境なる
雲にそびゆる 宮殿は
瑠璃 寶石の 莊嚴の
寶の池には 水澄みて
七重のうるきに網覆ひ
寶の蓮花は地に満ちて
ひかりに化佛現はれて
阿彌陀 無量 光王尊
相好圓滿 したまひて
無數の菩薩は法の身に
如來を繞りし 裝ひは
世尊大衆のなかにして
清風寶樹を吹きぬれば
あまつ乙女は雲を分け
妙なる花をあめふらし

應身の讚

舍那圓滿の 阿彌陀尊
八相應化の 迹を垂れ
先づ出初めし雲居なる
天地よろづの 民草に
地に出てはカピエの

こころの知見開くれば
花藏世界はあらはるれ
金 銀 摩尼 眞珠
照り輝くこと極みなし
金の砂は 照り徹ふる
花と果は かゞやけり
無量の色にひかりあり
微妙の法を説きたまふ
身色 金山王 の如と
威神のひかり極みなし
智恵と功德と備はりて
雲の月を かこむごと
妙法を説きて已るとき
百千の樂を作すがごと
天の伎樂をならしては
佛と大衆にちらすなり

讚

靈を忍土にわかちては
釋迦牟尼佛と號けます
兜史陀の内の宮居には
めぐみの露を漏ほしぬ
淨飯王を 父とはし

時を選みてたましむを
うづき八日の長閑さに
降誕す聖子の初聲は
一切の善事遂ぐるてふ
圓かにそなる相好は
學の園生にのぞみては
技藝の林にあそびては
四門の遊びに仇し世の
天の下を 統治めす
人の倫とて 妹と背の
最と睦まじき閨の門に
上なき道の得ま欲しく
乾陟馬王に御されては
深山の雲を分け入りて
みづから鬚髮の除ては
千里の霞を踏みのぼり
解脱の道を計ひしかど
尼連禪河のほとりなる
具さに苦行を積りては
こがねの流に浴みては
献ぐる乳を受けまして
伽耶の毘鉢羅の樹下に
むすぶ跣蹴いかめしく
天つ魔羅が吹きおこす

摩耶の母胎に降します
ラビの園生の花のもと
天と地とに 響さしと
恐達多君とは名けらる
梵仙阿私陀を感かし
五明四吠陀の花をめ
奥義の室に入るとかや
常なき相をさとりては
上なき位も避けたまひ
契り染ける耶輸陀羅と
王子の羅喉羅を擧かど
ささらざ八日の 曉に
ひそかに宮を出ましぬ
たまの傍をぬぎすてつ
法の衣に 替えたまふ
アラ、ウドラの仙人に
意を得さで立ち去りぬ
緑の草しくそのふにて
六度の春を經にけらし
ナイナの女ナダバラが
頓に氣力をよみがへし
金剛座の こけむしろ
三味の床に曳きしめぬ
百のいかづちむら雲も

ト調 應身の讚

6-6 | 764 | 3-4 | 3- | 4-3 | 6-4 | 3- | 300
 シ+ ナ ユン マン ノ ア ミ ダー ヲン

434 | 6-7 | 3-1 | 7- | 173 | 1-7 | 6- | 600
 ミ+ マー ナ コ コ ニ ヲー カ チ テ ハ

7-7 | 7-7 | 1-7 | 6- | 7-6 | 4-6 | 3- | 300
 ハー ツ ソー オー グ ノ ア ト ナ タ レ

3-4 | 5-5 | 4-3 | 1-7 | 671 | 3-6 | 7- | 600
 シ+ カ ムー ニ プー ツ トー ナー ツ ケー マ ス

青天芥かに照りわたる
臘月八日のあかつきに
無明生死のゆめさめて
佛陀のおしへは正覺の
牟尼の法は 涅槃なる
世を度ふこと五十年に
應化の迹は狗尸那なる
まことは久遠 實成の
常恒に樂しき御國にて
願はくは我が 同胞よ
聖旨に仕ふ身と爲りて

月には障りあらざりし
明星仄かに出しとき
無上正覺を得たまへり
無量の光をさとらしめ
無量壽國にかへるなり
三輪まどかの鏡を垂れ
鶴の林に かくれしも
無量壽佛にましませば
光明攝化のきはみなし
恩寵のひかりに更生身
安き御許にいたらん

如來は唯一りの尊とき大ミオヤなれど
も私共の爲に三身に分れて御慈しみをた
れ給ふて居ます。法身は一切衆生をうみ
なす大本のミオヤにて天地萬物は其恵み
と力とに依て行はれてをる。報身は宇宙
最高の處に在して、法身からうみなされ
たる人が信心念佛するに對して恩寵の光
を以て之を攝化し永遠の生命と爲して下
さるミオヤにて。應身は救のミオヤ即ち
釋迦牟尼佛である、此三身を合して三身
一如の大ミオヤと申上ます。

ハ調 法身の讃

1113 | 2221 | 2233 | 5-0 | 6665 | 1166 |
 アフグモ カシコキ アミダソ ン サンジン イチニョノ
 5553 | 2-0 | 1111 | 2255 | 3355 | 6-0 |
 ノリノミ ハ マカビル シハナト ナツケテ ハ
 1122 | 6653 | 2232 | 1-0 ||
 ヨロツノ ハジメニ マシマセ リ

法身讃

法身とは如来三身の一にして宇宙萬物の實體一切萬物は之より生じ之れに保存せらるゝのである讃歌に、

天つみそらにつらなりし、かそへぬほしのめぐれるも、地に生ひしげる草木より、生きたし生けるたくわまで、天則秩序を、規定に随順さま見れば、萬物を統一て攝理ます、法身如来の権能ぞしられけり。

清宵に蒼天を仰ぎ見る時は無数の霜宿が基列して居る。實に九蒼の無限なると星宿等の數量のはかられざるを見て驚嘆の外はないのである。あの星は何れも太陽系に加る地球の如く、遊星惑星恒星等の種類は數多なれども何れも一定したる軌道にありて其規律に隨て運轉す。無限の宇宙より見れば實にはつかしい小なる現太陽系に

變へ調 報身の讃

7-7 17 | 63 31 | 17 76 | 3-0 | 7-7 16 | 6-7- |
 ホン-- ワーホー ツーシー ン アミ-- ダ ソ
 ほん-- がーくー しんにょー の みや-- こ よ
 3-0 | 4-4- | 37 76 | 64 4- | 3-0 | 3-7 14 |
 ン ク ラ キーニ-- マーロ フ
 リ は ふ ぎうぼ-- きーつ の ーア-- と--
 2-2- | 3-0: ||
 ガタ め

かゝる吾等か世界をなす此地球を見て太陽を中心として私轉公轉して一定の軌道を守つて寸分たがはず億萬年を貫いてあやまたず。すべての星が運行する軌道があつて確乎としてたかはす。その規律その秩序を守るであるから天文學者は何の星は何百年目にどの邊に現るゝを豫測する通りに千萬年を徹してたかはす。もしあれが何か此の天則を統一し攝理するところ理性なしに單に物理的のみにみ解釋して彼れらが廻くるは一度風に木葉の吹き飛ぶようなものであると思はれませうか。

また悉しく申さば地球上の萬物に鑛物學者が鑛物の研究についても植物學者が植物の理を究め生理學者の生理につき何れも究れば究むるほど眞微妙なかなるところまでも周圍せざる處なき理によりて構造されて居る。

柳はみどり花は紅と大さつばに見ても如何にして柳のみどりは染めぬのに緑色を呈し、花の紅のいろはどうして着色したでせう、どうして小さな杉の實よりあのやうな大きな木となる性を有てるのでせう、どうして松の木は幹でも枝でも葉でもちやんとどういふぐわいにならなくばこれは松になることは出来ぬと思はれせんかと人間からおもわれるゝばかりによくかたちをなすのでせう。あなたがたは何と判じなされませう。それは云ふまでもなく天則と云ふ外に考へはないのでせう。

火はなんで熱いのでせう。またものをやくのでせう。水はなせに濕ふのでせう。矢張りそれは天則の自性であると云ふ外に答は出来ぬでせう。それは人間ばかりでない禽獸までも眼は見ゆる耳は聞ゆる鼻は香を嗅ぐ舌で味ふ。どうして眼は見ゆるでせう耳はなせに聞ゆるでせうと問ひましたならば、それはおきまりあたりまへの事であると答へまするが、それではどうしてこのおきまりと云ふことがあるのでせう。するとなんだか知れないがきまつておるからと申しますが、それは矢張り天則と申より外はないのでせう。大學のなんたるを知らず生理の何たるを御存じのない尤も無器用な夫婦の間に出来る子供でも四肢五官より精神及神經組織營養機關生殖機關ちやんとそなはつて出来、しかもどれほど工學なども之れを製造すべき方法の説明なき、いかなる

細工人も毛一筋も出来ないののでどうしてできるのせう。矢張りそれは天則といふ外はないでせう。

殊に殊に不思議なのは生物の中最も進みたる人間の精神作用でありませう。感覚があつて世界の事物を視聴嗅味觸するとそれに對していろいろの感覺が起るではありませぬか。快不快美しいみにくい青い赤い黒い白く又音楽の如きに到つても妙ではないか。か、亦人の言葉でいろいろの言葉をいふて心まで通せ知らせるのは、妙ではないかまた感情においても面白い可笑しい楽しい嬉しい悲しいにくい可愛い口惜しい痛ましい恐ろしいや、進みては理想とか高尚な愛とか忠恕とか道徳とか仁とか義とか勇とか、それから感情から湧き出して來る歌とか詩とか戀とか無常觀とか、とても限りある人間の月日では数えられぬほど出し來るではありませぬか、(蒸氣電信は發明なり) 知力として申したならば天地間の眼に見耳に聞ゆるあらゆる事物を研究する科學、それより深き宇宙の見えぬ奥までも探り究めて居る哲學とか、天地の秘奥なる神秘一つにならうとする宗教もあり、どうしてかゝる不思議なる精神のはたらきが出來るといふのでせう。唯物質の元素が偶然にあつて出來た精神がかやうに不思議にはたらけるものでせうか。また人の意志と申ませうか、人の意思といふ者ももたらぬ働きをするではありませんか。ギリシヤのアレキサンドルが働き、フランスのナポレオン日本の太閤みな意志の働きではないか。ヅツと進むで印度の釋尊猶木のキリストの如き精神の光明が廣く世界に長く二三千年も貫きて照りわたたりて居るやうなものを出産す。此天地なるものは天はたゞ蒼空地は土塊ばかりと思はれませうか。どうして 天地間には目に見えぬ真理のあるといわねばならぬでせう。何からかゝる妙不思議な働きが出來るといふは矢張り法身の如來の働きと云はなければなりません。キリスト教に云ふ如くに天に人間のよふな大工のやうな神がありまして云はゞ夫のやうな神のある證明は出來ぬと云ふでしやうが、宇宙の實體法身如來藏性即ちなんとも名のつけやうのない真理とも名づけねばならぬから、まづ天地萬物を産出する實體をさして法身如來

となつたのであります。天則秩序を統一せる實體なしとはどうしても申されずまい。その法身は物體でありとか精神態とかそれは物體とか精神とかの別々もので無く相對的のものではない。絕對心靈態は兩方をすべて一體たるものと云はなければならぬ。この絕對無限の權能によりて天地萬物見えぬものも見ゆるものも全體が統一し舞理せられて居ると申します。遍くましますからみおやをたゝえ奉まつるのであります。法身の實體と申すはいかなる體であると申せば、宇宙の本體宇宙としてそれを離れる者は物體とも精神とも云はれぬけれども、まづ心である。唯一絕對無比の法身如來にかしこみてまことを稱へ讚美したてまつるのであります。

目に見ゆる現象で盡きて居ると思ふとそれではまだ一實體はまだわからぬ。現象界は太陽でも地球でもすべての星でも萬物はみな産出されたものである。産出する實體と産出されたる宇宙萬物と同じ事ではない。萬物は生滅變易すれども實體はそうではない。その量は無限にして空間に徧し時間に徧していつこにてもその法身の實體がみち居らるる所はない。然らば如何なる理から法身は出來たかと云ふと決して出來たものではない。永恒自存の靈體といふのである。全知全能の性能ありて自然の智であるから萬物には秩序があり理性があり真理は萬物の中に含著して存在するのであるから萬物はチャンと秩序に隨つてうごく。また全能と云ふ力があるから萬物は出來るではないか。是もまた勢力の宇宙に充ち我らが身の中にもみちて萬物に含著して居るから太陽の能力も地球の力も人間の力もすべての力も大本は法身藏性の外はない。若しその大本がないならば太陽も生きて居ること能はず否な活きてる所でない産出することがないのである。

一切萬物は常恒不斷に建設的事業を以て萬物はじめなき昔より終りなきまでに建設事業の宇宙に行はるゝは、悉く法身の能力であります。一切の萬物はこの天則秩序をはなれて宇宙間同一つとして存在するわけも生産することもないのであります。此の絕對無限の御力にて建設せられたる宇宙でその中の太陽系その中の地球に生息して居

る人類の人であるからこの法身を離れてわれは生れる事も生存せる事も出来ず目が見え耳が聞え身體も精神も天則の實體から出来たものであるから實に無限の宇宙の秘奥に満ちて萬物を顯動せしむる法身如來に對して我れはなにと云ふことばを以て稱讃してよいのであるか申しやうはないのであります。

報身如來の讚

三身本體であるけれども我れらには心靈開發せぬほどには天地萬物の不測の働に付ては驚嘆する外はないけれども精神の觀念に於て宇宙深奥の秘密の内容に就ては一向見え聞えず分らないのであるけれども宇宙は唯肉眼で見たばかりの頑空ではなく最深の奥に秘せる眞理は心靈が開き見ざればわからない。

至人達人の心眼から見れば實は宇宙は煩空ではない。如來の世界である。至眞至善至美眞理の靈界ともまた蓮華藏世界とも知慧の世界とも極樂世界とも申して言語道斷唯眞の眼で觀するものである。これを清きみくにと申すので常住安樂自在清淨の界で金銀寶石眞珠を以て莊嚴せり幸福と光榮ばかりでみちみちたるところに如來八萬の相好光明普く十方世界を照します眞金色の如來身に無盡のすがたうるはしく威神巍巍としてきはまりなく萬徳圓滿し玉ひて十方世界を利益し玉ふのである。無上の智慧の光明は普く十方世界に照して人の心靈を開發す。そふ申すとまた疑ふのでせう如來の光明は如何してみえぬのでせうと。これは肉眼に對するような廉末な光明ではなく精神を照す光明である。眞理の光明である、智慧の光明である。

釋迦佛もキリストもその外の偉大な人々がこの眞理の光明によりて夜のあけた如くにあかるところの生活をなされたのである。

古の聖人が曰れたやうに、常人の晝と見て居るのは肉眼の晝でそんなものは聖人から見れば眞の明ではない。聖人の晝と云ふは精神の目が醒めて眞理の光明中に生活

して居るのである。聖人の晝と見るべき觀念界に對しては凡夫には一向わからない暗である。夜のやうなものである。眞理の光明によりて心の夜を見たならばこゝがこのまゝ如來光明界中である淨土である。よしそれまでとはわからずとも、理想だけなりとも光明中であると觀せらるゝであらう。その眞理の光明は眞心にいのるところを照して開發するのである。この光明を經には、彼佛光明無量、十方國を照障礙するところなし、としてどこでもさわりになるものはない。人の見ぬところを觀、人の聞かざるところを聞き、人の知らない人の心の奥までも照し、照すばかりではない。眞理を見る事が出来る眼を明し下さる。我れらが眞智と申すのは矢張り如來の知慧光明が此の中にあるのである。いのる心のまどをあけてとは、精神を照らす光明にてまゝませは肉眼では感覺すべきものではない、至誠心に信念いたる時心眼開發して感見することが出来る。其時が心の障礙即ち心のあけほのである。凡夫がその時聖人の仲間入をしたのである。そして精神の眞生となる。

神聖正義のみかじみとは、

如來の大智慧の光明とおよび其の勢力とは神聖正義である。眞理の光明である。これには無上の権理があるので此光明が我れらの心にあり、最高等なる良心とも心靈とも高德心とも云ふのである。そう云ふ眞理の光りにて自己返照して自己の性惡を見る事が明である。正義の勢力に我等は化して正しい義務感情でよい事は自然に働けて活動せずには居られぬ。それはつとめなくば自己胸中の正義にどうもゆるさぬところとなり、また非なる邪なる迷なるをばどうもなしてはならぬぞと云ふやうに胸中から衝動するのである。

神聖正義の觀念のあなたは神聖正義の光りが自己に對してかみに向ふて照さるゝ觀念で自から神聖自から正しく動き出るのである。

めぐみの御名とは

あなたは聖き恩寵をあらはす爲の聖名であるか聖名を稱ふる時尊き御旨の自己に感

じられて苦惱の中にあつても直ちに轉じて聖らかにやすらかに樂しく觀せらる。いかりの炎がおこりてもたちまち消えて、穩になり現にこの胸中の地獄餓鬼畜生の三惡道から聖名を稱へ御めぐみを感じてすくはるゝのである。

三つのみのりとは、

法身般若解脱の三徳なり。此三徳を以て如來は私どもをけがれたる闇き邪の惡の意を解脱して眞の眼が開け靈化のきよき善き正しき人々となるるのである故に其の三徳圓滿の如來に誓首禮拜したてまつるのであります。

如來應身の讚

應身とは清淨界の方面にまします如來がこの地球即ち迷ひの方面に此世界のの人に相應したる身を示してをしへをなされたる釋迦如來である。矢張り彌陀如來の分身と申します。

みめぐみふかきをしへぬしとす、

大恩教主といふは釋尊のこと八相應化と云ふは娑婆に出て初生の時から涅槃の時までの化儀に種々の相があるから、

- 1 生天 人間から生るゝ前に兜率天にて天人を教化したる時を云ふ。
- 2 下天 天より降るとして六牙の白象にのりて天人に圍繞せられて。
- 3 託出胎 御母マヤ夫人の胎にやどられ十月にして降誕せられたりラビニ園にて四月八日なり。
- 4 出家 太子老病死を見て世の無常を悟り發心出家して山に入りて學道せられたり
- 5 降魔 六年修行今成就せんとする時外から天魔が來て試み内より煩惱等の魔が出たけれども皆降伏してしまはれた。
- 6 成道 佛陀伽耶菩提樹の下に於て三昧に入りて降魔の後に無上正覺即ち煩惱の

聞と惡罪の源を盡して無上の眞理を發見し玉ひしなり。

7 轉法輪 初鹿野の說法から終りくしの涅槃の夕まで四十九年の教化。

8 入涅槃 八十の御年くしの竹林双樹の下に於て入涅槃し玉ふ。

己上を八相應化と申します。日のをかげとは喻へである太陽であかるくなるやうにうきよとは憂き惱みの世界、やみとは心のなやみ何れより生れ來りしも死して何れへ行ともわからぬのである。

高峰をてらすとは、釋尊が正覺即ちさとりを得てすぐに華嚴といふ大そうな高尚な法門を説かれたからそれを喻へて太陽があさ先づ照らすのは高山の眞であると、それより五十年間の御教化、ついにクシナのばつ提河のほとり沙羅双樹の下に於て涅槃に入りなされたを、双樹の葉のわかれとも云ひ夜半とは二月十五日の夜半に入滅なされたからである。

其間におゐて御教化なされたそは非常に廣大なものである。

みむねにさける法の華とは、

上もなきさとりなり。無盡の法門まで悉く如來の心のうちには如來藏に開發して十方世界は如來の心である。宇宙の眞理として開發せざるはないのである。

金のこととは、

釋尊の說法を金口と申すは一々の金口衆生をして間の中より明きに罪の中より正しきに靈福にならしむる能を有する故に金口と喻へたるなり。

身にむすぶとは、

身と心と言つて行と業と實とに喻てそこに釋尊の身に於て一點の汚れもなく實に完全無缺なものでありしことは實に圓滿なものでせう。

六根常に清らかにとは、

聖意に少しも非靈がないから、中に充滿せる聖靈能が眼耳鼻舌身に自らあらはて清らかなり。大經に世尊諸根悅豫して姿色清淨にしてうるはしく光顏巍々たりと。

内に靈にましますが故に表にあらはれたのである故に肉體につきいかなる場合も驚き青ざめ怒りて赤らめるようないりる變るよふなことはない。

内に慈悲と知慧とにましますば、

三輪完徳の鑑

三輪とは身の行爲と言語と意の思想に於て實に至善至徳で完全なる道徳の鑑である吾等にのりをたれたまふ、

實にわれらに釋尊五十年御てほんをしめし下されたのである。

さかむにを稱讚したてまつる。

釋迦牟尼を稱讚したてまつるなり。

如來の三身一體の事

アミダ如來は三身一體とて本一體にして三位にまします。三身とは一、法身二報身三應身是なり。

法身とは天則秩序の統一の本體にして宇宙萬有の源にて、有形の物も無形の心も悉くこれ如來法身の本體より開發せられたるものであります。この法身の實體に統一擔保せられざるもの一としてないのであります。故にすべての物の中に此力に攝取るものは救済るゝのであります。

法身は絶體無限にして在ざる處なく、形もなく、相なければ、すべての形と相との本體であります。

法身は本然永恒にして始なく終りなく、また一切知、一切能にましますば、世界の一切の事として知らざるなく能はざるなき靈體を法身と稱します。

二に報身とは圓滿報身と稱へて至真と至善と至美の眞理の靈界最高等の處にましますして、神聖、正義、恩寵、全知全能等の萬徳を備へ玉ひてあらゆる世界を統治し

て、信仰の人々に無上の恩寵を以て攝取の光を與へて愛護したまふので、その人の心靈に最と聖き徳と、最と多福とを與へたまふ。而して此を信する人々は此身のあらんかぎり無限の愛護の中に生息し後には直ちに無限の生命と無限の光明との光榮を得るものであります。

聖經に無限の光と壽との源にまします如來の智慧と愛との光明は遍く一切の處として、照らさざるなく聖き御名を稱へて聖き旨の自己に現はれんことを祈る人等をば無上の愛を以て擁護して離るゝことなし。彼の報身の如來は最と聖き處にまします。淨き御國は靈福と光榮のみと聖典にのべてあります。

斯の圓滿報身の光明は遍く照して亘らざる處なきが故にすべての物は此光明中にあるのですけれど自ら之を知らざるのであります。いと聖き靈なる光明は肉の眼と肉の體とに感觸すべきものにあらずして信仰のふかき心の眼と心の底には晝るも夜るもまた何の處にても之を感觸することが出来るので、この何所にも感觸することの出来るので此光明こそ宗教意識にとりては最とも尊ともむべき眞に活ける所の光明であります。

吾人は此光明の中に榮ある生活をなしてこの肉體の終りには平生如來の光に愛育れ靈化せられたる心靈はかたちを出で純粹至精の聖徳と靈福とのみの清き處に入るのであります。其處にては全然靈の中に入るのであります。

第三應身とは人の心機に應じて示さるゝ身にて此に二種ありて一に應化身二に感應身。初の應化身といふは前の聖き國に在ます報身の知慧と愛と力によりて此世界の人類に救の光りを與へんが爲に、聖格を人の肉の身の中に顯はして、釋迦佛陀といふ形相を以て愛を現はし玉ふたのであります。釋尊は人の體を以て言語と思想と行爲にて聖靈を示したのですから、釋尊の生涯の歴史は吾人にすべての心靈を活す所の罪惡をすて、靈を現す所の模範を示したのであります。釋尊はアミダ如來の分身と申し上げ

二に感應身と申すは人の信仰心に感應する聖靈體のことです。本來人には佛性と申して天則の中に靈性の能が潜伏して居ることは木の中に火の性が具するようになるものであると云ふけれども、自ら木より火は發するのではなく外より火を點するときに忽ちに火光を放つようになる如く、人の靈性は天然的に獨りてに開發するものではなくして釋尊でふ人の身を以て示したる應身の中に靈格あることを思ひて、肉の身は已に滅びたるも相好光明の尊嚴は吾人の心の奥に燦然として光を放ちてましますことが感じられます。世にアミダ如來の尊像と申すものは眞佛の靈を宿したる釋尊の御すがたを即アミダ如來と申して居るので、木に入つて見れば同じことでは有ますけれども、眞佛は深高にしてとても直接に感見することは出来ぬ故に、最も高き徳と智慧と愛とのみの靈を以て充されたる釋尊の御すがたを表象したる尊像なり木像なりこれを拜見して自己の心に印象して常に信念を専らに注ぐ。また其の尊き御意の現はれんことを祈るときは、いつか自己の心の奥に聖き靈は感發せられます。頓速にゆかずとも至心に祈るときは漸々に聖き靈に感染せられます。

此靈應身は、人の心靈を開きて、心靈を顯はして見る時は、觀念的に表象を感じて客體から感じたのと、自己の心の奥の心靈が顯はれたのと同様に不二となるので、丁度木に火を點したるは外より添へたるものなれども續いて燃へて光を放つて居るのは自己の火にてあるが如くなので、本より心の奥に潜んで居るのもまたそれを應身として表象を感じたるも其大本に至つてはどちらも同じくアミダ如來の法身より分れたる外ではない。そこで、法身として宇宙全體に充滿せる無形の眞法身如來の本體が實在するので、また一方には萬徳圓滿の報身如來とて寶上至美の相好光明を以て普く十方世界を照して信するものを攝取して救済したまふものとが本より在すけれども然れども本體は吾人には拜むことが出来ぬ故に釋尊でふ人身の靈格の應身を以て、世界に如來の愛を示しなされたので、而して釋尊の肉體はかくれても其尊き御面かげをのこしなされたので夫を深く愛慕して念しますると、吾人の心の中にいと聖き尊き相容が御

うるはしき愛を表してつねに吾人の心眼に彷彿してまします。この媒介によりて無上の樂園と常住の靈界とに心は安住することが出来得るのであります。この三身は一體にして三位と申し上ます。

聖名のこゝろ

尊き御名即ちナムアミダブツとは此三身を總表してアミダブツと申上ます。アミダと云はもと梵語にして之を翻譯する時は無限の光明と無限の命といふ義にて宇宙全體に遍在せるまことの如來にて無限の光明は空間を盡して照さるなし。無限の壽命は時間に徧して在さるなき靈にてまします。ナムとは歸命とて自己は罪惡の本なれば主我といふ私をすて、全心全幅を無限の光と力とに在ます如來に歸命し投歸して没了してしまふのであります。罪惡の本たる私をすて、純粹至靈にまします如來に歸しまするときは心がかたがり聖き靈と生れ更るのであります。一たび心が更生しますると此身このまが無上の愛の光の中に安立して居ることが實際に感しられます。ねてもさめても何こでも如來の大なる恩寵の中でありまます。これが名號のすがたであります。

心が愛光の中に安住する時は愛の中にも恐ろしき中にも苦難の中にも愛即ち靈がましまして大なる安慰を與へ玉ふのであります。聖名を稱するのは自己の心に聖き旨が現はれたまふことを祈り上げるのであります例せば月と言ときは月を想ふごとく、如來の御名につきて聖き旨を自己の心にはらすのであります。聖き旨は矢張りうるはしき御相容にあらはるゝのであります。然れども單純に御名につきて一心を如來の大海に投ずるときは自ら我をわすれて常に如來の中に心が安住するようになりまます故に其想に任してから、活きて在まさざる所なき如來の御名となへて自己の心にあらはれて活きて動きたまふようにつねに祈ります

この世のおほりには直接にあなたの微妙莊嚴の常樂世界に神が遷りゆくのであります。彼に轉化する時は無量の光の中に無量の壽となるのであります。四十八願はわたくし共にすべての徳をあたへ下さるために御立てになりましたのであります。

報身の如來は淨土にましましてつねに何處をも照したまふて御座れども凡夫にはわかりませぬもの故に、この世界に如來より一分の御身を現はしたまふたのが即ち應身の如來と申しあげます。

應身とはこの世の人に相應せる身を以て現はれなされたる、即ちしやか如來にてあります。しやか佛は如來の分身であります。印度のカピラハートの淨飯王を父としマカマヤ夫人を母とし肉體をかりさせ玉ひて神は即ち如來の御わかれであります。無上の位も富もすべてをうち捨てゝわれらに眞理の光を示さんが爲に山に入つて道を學び難苦の行を積なされて終に三十の御年にして御さとりを得なされたので御さとりによりてかたちは人間ですけれども御心は即ちあみだ如來であります。身はこゝにましまして御心は淨土にましますのであります。三十の御年より八十に至るまで五十年間の生涯は私共に行、と言と思とにおいて如來の徳を示し下されたのであります。これを應身と申上ります。この三身は本一體にてあります。

私どもには法身から生じたる方からいはず佛性といふきよきたましいがあるけれども、肉體についての心は罪惡のかたまりであります。此の罪惡のかたまりは自身の手力ではどうしても取りのぞくことは出来ぬので、また自分の力にては成佛することは出来ませぬ。これを救ふために如來が法藏因位の四十八願と無量の行をもてわれわれを救ふみをひらきて、すべての徳を御名にあらはし下された。故に聖き御名をとなへてあなたに歸命信願する時は必ず救ひを得ることが出来るのであります。

愛 慕

法華經に、一心に佛を見んと欲して身命を惜まずして如來を戀慕する故に我其人の前に現前して爲に説法すと。如來は肉眼にて見ることはざる法界身にてまします。一心の花開き三昧に如來の法身と相應するに非ざれば感見して如來の心身を拜すること能はざるのである。

古往今來諸の賢聖衆も此の爲に全く身命を忘れて一心を投じて戀慕願して措くこと能はざりき。法藏比丘が五劫の思を焦したるも釋尊が六年神をいたしも法身を見まほしさにしたるに非ずや。見よ彼の滑稽禪師の仇名せられたる一休和尚が行業を見るに世に彼れほど酒々淫蕩無貧惜にして玉川の氷にて酒ぎあけたるような性格外に期の如き僧もなからう。彼れ世のことには榮を愛せず名を求めず實にさつぱりしたるものである。なれども彼とても此道の愛のためには神を傷め思を焦したる時代を通り過したることはなかなかである。小説らしい彼が物語にあるでないか、彼一休一大事因縁の工夫の爲め専ら心を潜めて居られし時に彼が檀越の人々が友だちなことを引つれ一休の許に訪づれては雜談をなすことなどを和尚如何にも謹しく工夫の妨ともなればと思召て御心地あしきとて一周に引こもりて一向に人々に出會玉はざれば人々心もとなくおもふて折々見舞申侍りければ、御長髪ほうほうとし玉ひ何とも御氣色とも見へず唯御惱みとのみ仰せられければ、檀越及び知音のものとも寄合まいらせいかにも氣遣はしきことなりとて時の名醫を入れかへ入れかへ診察まいらせたり。御いたづきはいかにも問へば醫師が申されるには、他診には少しも異状見へすいかに不審なる病氣にてそと何れも何れも同様なる診察なれば或時檀越の親密なるもの共が集り評議にはいかにも和尚の御なやみの容子は診察上に顯はれざる病氣については、未だ年若き御僧のことなればもしや戀などの爲に思を煩はし玉ふのにてはなからんかと人々口々に申される、若しもかゝることなれば、人多くしては明しかぬることと待らん、密かによき中の知音のみが二三人ばかり見舞てぞと伺ひ侍らは誰にぞと名さしあるべし、然らば誰人にもあれかようにして御本意を達させ参らすべしとて賴母

しく言合せて密に三人参られたり。和尚に出おふてまつ四方山の物語りなどすみて一人の男が申出けるには和尚サンよ此程來御病氣の御事につきさまの御療治にても御本服にならず醫師の申さるゝには御脈には少しも平生とかわることなしと何とて心深く渡らせ玉ふぞや、定めて戀をなさると見請け侍れば愚かなるもの、僻目かは存じませぬが若しも私共が申上るようなことならばあからさまに仰られ玉へ、私共の力の及ぶ限はかなへ参らせ申すべしと、打ち明けて申ければ、一休如何にもうれしげなる御面色にて申されけるは、此上は何をかかくし申すべき、此日頃戀わびてかくはやつれば候なり、能こそ頼母しくも仰出させ玉ひしぞ、何とやらん我らには似合ぬ事にて侍れとも、各々は日頃のよしみなればひとへに沙汰なかなひし玉へ、しかしながらいとならなしに心みだれてむづかしやそれと名をば面上にては述べかたし、一筆しめして参らすべし、門外へ出玉ひて各々御覽じていそぎかなへ玉はらば我がいのちはなからへておのゝ方に其かはりよき道おしへ申さんとて、奥の間に入り一筆さらりと書て引ひすびてから三人にわたし玉ふ。三人はよろこび御心身よく思召されよとて門外へ去り出てよりさてこそ申さぬことはとて急ぎ其名を知らまほしくて彼の文をひらきて見れば斯はしられたり、

本来の面目坊がたちすがた一目見るより戀とこそなれ

われのみかみやかもだるまもあらかんもこの君ゆへに身をやつしけり

と二首のうたかゝれたり三人の者ども横手をうちて案に相違したることを慚謝したりけり。彼の和尚の如く落なるものとても道のため即ち法身の眞面目を見まほしさに戀着愛慕して身を憔悴せしめしなり。

愛に肉の愛と靈の愛とあり。肉の愛にまた肉愛我愛なり。肉を愛するが故に禽獸的の愛おこり。またあさましき痴愛に溺れて、三悪四趣に墮落す。我愛によるが故に自己の主我のみを愛して眞理の源なる如來を愛することなきなり。如來を愛するは心靈の愛なり。如來を愛するは自らの心靈を愛するなり。いかにとなれば自己の心靈は

如來の一大心靈の分なればなり。如來を愛する時は自己の心靈を愛すると同時にまた一切の衆生の心靈を深く愛するにいたるなり。一切衆生の心靈は如來の一大心靈の各個々なればなり。

いのり

法身報身應身の聖き名に南無したてまつる。

三身即一にまします唯一の如來、如來の眞心身は何處にも在さるる處なきが故に今現に此處に在すことを信じ至心に恭敬して拜禮したてまつる。

如來の最も大なる恩寵を感謝したてまつる。我らは如來の威力と恩寵によりて生き活動き存することを得るなり今日の生命は全く如來の賜なれば身と心を捧げて事へ上らむ。願くは聖き旨によりて一に光榮を現すべき務をなすの聖寵を垂れ玉へ。

教主釋尊は諸根悅豫し姿色清淨にして表裏に暢るが如きの光影にましましていかなる境遇にも姿色變じたまふことなきは内全く靈にましませばなり。

主の完全の鏡に倣うて慈悲、智慧、正義、剛毅、堪忍、精進等を體してつとむるの力を與へ玉へ。またいかなる苦難にも姿色變りなき驚動なき安忍を得るの力を與へ玉へ。内靈にみちて怨親平等にすべてのものに同一の愛をもて観ることの力を得るの聖寵を垂れ玉へ。

如來は我が弱きを知りたまふ。恩恵によらざれば何事もかなはざる故に必要に應じて之れを與へ玉へ。佛の去らしめたもふ惡を去り、佛の行はしめたもふ善を行じ、佛の捨てしめ玉ふ主我を捨て、聖慮に隨順して其聖子たる務をなすの力を與へ玉はんことを冀ふ。

永遠の光なる如來、大なる慈悲を垂れて我を愛護し玉へ。聖善提心をして益々増長せしめ此世及び後の世聖寵に攝受せられ一切の衆生と共に同く安き國にあらしめ玉

へ。
 無上權威なる阿彌陀如來に告白したてまつる。自身は現に是れ罪惡の凡夫なり。貪欲嗔恚迷妄とに由つて行と言と思とに於て多くの罪を造れり。是皆自分の過りなり實に大なりと感じて至心に懺悔し奉る。如來は全智にましますば我等が罪の多少を知り玉へり。また正義にましますれば我が罪に瀆るゝことを嫌ひ玉ふ。如來よ大なる慈悲をもて我らが已に犯したる罪を赦免し身心共に清らかならしめよ。今より改悔して邪惡を捨て正善に歸せん。願くば恩寵によりて再び過ちに陥ることなき正しき聖き人とならしめ玉へ。

三身即一にまします如來如來の身心は在る處なきが故に我らが信心の窓を開く時は何の處に於ても聖寵の光に接することを得。我らは正に身心を捧げ上る。しかる時は今此身心は至尊の靈應を任せしめ上るべき聖殿なりと信す。靈應身我が心殿に常に住したまひ、我らは靈によりて六根清淨に心情平和にして靈福を享受し靈的活動することを得。至心に勸請し上る。靈應身常に我らが心殿に降臨し玉ひて、常住轉法輪したまはんことを冀ひ奉る。

我らは無明により主我見を起し、彼此を分別し、他人に對して嗔、憎、嫉、怨、復讐、害意、凌辱、讒謗、等の惡意を以て佗を傷ひ自ら作し佗に致へて佗を損害せしめて却つて喜びたりき。今聖意により靈光によりて始めて靈覺醒寤して即ち識る、凡そ人類は靈によりて同一の聖子同胞なることの故に、すべての人の榮と福とは其源は悉く如來の光榮が人の身器によりて實現れたるものなり。今よりは凡ての人の幸福に於ては至心に隨喜し人のつまづきは靈を離れたる故なれば之を傷む。

願くば靈によりて相互に慈心を以て相向ひ愛眼を以て相視て靈の同情をもて同胞相勸め相進むべきように聖寵をたれたまへ。
 我ら従前は無明罪惡終に亡びに趣くの外に途なかりしものなりき。然るを聖旨によりて昔の非をさとり至心に心を同らして聖に向へり。今より無上道を得るまで聖旨に

隨つて寧ろ身命を捨つるとも聖意に背かざらん。自ら聖寵によりて眞理を得たる如くすべての同胞を誘ひ一切と同じく聖道に入り、獨り自ら安を求むるのみに非ず一切衆生と同じく安寧を得んことを冀ふ。
 至善なる如來、至尊なる聖寵の救靈によりて永遠の生命に入ることを得せしめよ。主の世つぎたらしめよ。是に希望するところなり。自ら獨り救ひを得るのみに非ず一切の萬類と同じく救度し玉へ。また能はざるなき知らざるなき靈德を與へ玉へ。最圓滿の靈格に同化したまへ。完徳の鑑たる釋尊の如く、慈悲、溫和、智恵、正義、堪忍、剛毅、等の靈的活動の力を與へ玉へ。主を愛する精神を以て活動し光榮とならしむるつとめを得るの聖寵をたれ玉はんことを至心に發願したてまつる。

會報

全國光明會幹部念佛會協議事項略報

- 大正十三年九月二日より四日まで京都にて開催出席者は
- 笹本總監(横濱市) 藤本上人(山口縣) 大村心定師(金澤市)
 - 山崎辨誠師(千葉縣) 丹波圓淨師(福岡縣) 大谷仙界師(福岡縣)
 - 中川弘道師(福岡縣) 大野默堂師(京都府) 渡部卯平氏(愛媛縣)
 - 角岡界倫師(愛知縣) 伊藤萬吉氏(名古屋) 林金三郎氏(名古屋)
 - 長谷川順孝師(大阪市) 高井善成師(三重郡) 小林義道師(神戸市)

- 佐々木爲興師（廣島市）。 竹内喜太郎氏（東京市）。 菱田隆道師（京都市）。
- 恒村京八氏（京都市）。 井上法雲師（京都市）。 北川昇隨師（京都市）。
- 白崎海嚴師（京都市）。 本間榮吉氏（神奈川）。 中井常次郎氏（和歌山）。
- 井上隆森師（京都府）。 西岡音吉氏（滋賀縣）。 蚊野仙次郎氏（京都市）。

以上計二十七名（次第は當着順）

○協議決定事項

- 一、宗祖大師と光明主義との關係、光明主義と往生主義との關係、往生主義と見佛主義との關係。
右は御遺稿安心問答を中心とし「人生の歸趣」其他を念佛體讀し、矛盾衝突なき光明主義なることを明示すること。
- 二、笹本上人を従前の如く總監に推戴すること
- 三、各地代表の評議員若干名を、總監より囑托し、毎年一回以上、評議會を開き、教法宣揚會務發展を謀ること
- 四、如法別時念佛會の定期道場若干を選定し、自行化他の策進を期すること。如法別時には念佛の外は無言
- 五、特に通俗講習會の開催を獎勵すること
- 六、評議員中より常務理事一名、會計一名を囑托す
常務理事 井上隆森師。 會計 恒村京八氏
- 七、如法別時念佛三昧會、定期會場（來年より實行のこと）
毎年五月二日より五日間 廣島縣 宮島 光明院
同八月十八日より七日間 長野縣 上諏訪唐澤 阿彌陀寺
同十月二日より五日間 佐賀縣 田代 西清寺
同十二月二日より五日間 京都市 岡崎東福ノ川 公安院

（評議會は京都公安院にて開會す、會員先亡諸氏の法名等同日迄に聯合事務所に報告を乞ひ追悼回願すること）

八、聯合事務所を、京都府相樂郡木津町正覺寺中に置く

地方代表評議員囑托氏名

- 九州地方。 丹波圓淨師。 宮川彥次郎氏。 松本正記氏。
- 四國地方。 大島彦瑞師。 渡部卯平氏。
- 中國地方。 中山法産師。
- 神戸地方。 小林義道師。 鶴田昌造氏。
- 大阪地方。 三木惠教師。 長谷川順孝師。 清水恒三郎氏。
- 奈良地方。 中村覺道師。 中井常次郎氏。
- 京都地方。 菱田隆道師。 井上隆森師。 恒村京八氏。
- 伊勢。 高井善成師。 山里秀隨師。 中瀬小三郎氏。
- 名古屋地方。 角岡界倫師。 伊藤萬吉氏。
- 關東地方。 平野開榮師。 竹内喜太郎氏。
- 北越地方。 吉岡性空師。 中村禪定師。 原六郎氏。 大村心定師。 羽賀虎三郎氏。

○九州光明會報

○組織を變更し下の役員を置く
主幹笹本上人。 理事三名大谷仙界師（總務）。 榎藤賢祐師（一般及會計）。 中川弘道師（版布係）。 會報主任手柴一海師（以上分會主任及主幹の推薦に係る）
常置協議員五名。 西山賢道師。 堀實道師。 橋爪實誠師。 武田哲哉師。 古賀良念師。
顧問若干名。 重松泰順師。 圓波圓淨師。 柴田鳳山師。 杉山碩翁師。 辻村瑞嚴師。 立川圓月師。 二本松順應師。 久富廉定師。 以上を推薦し承諾を経ること